

イエドヴァブネ事件—ポーランド人の歴史認識をめぐって—

栄光学園中・高等学校 福本 淳

はじめに

ポーランドは中世における歴代国王の誘致政策もあって、多くのユダヤ人が住み着いていた。第2次世界大戦直前期、世界のユダヤ人総人口およそ1700万人のうち320万人ほどがポーランドにいたと言われる。ポーランドの総人口の約1割である（ちなみに現在のイスラエル共和国の総人口は約600万人）。この世界最大級の人口を抱えていたポーランド・ユダヤ社会はナチスの占領で壊滅的な打撃をこうむる。今回はこのポーランドにおけるユダヤ人の問題を象徴するある論争を紹介したい。

1 ポーランド人の歴史認識とイエドヴァブネ事件の基礎知識

ポーランド人は自国の現代史をどうとらえているか。キーワードでいえば「英雄史観」「被害者意識」という2点に集約される。ポーランドは第2次世界大戦勃発と同時にドイツとソ連に蹂躪・分割され、さらに1941年の独ソ戦開始で全土がナチスの支配下に置かれ、長期間のナチス占領時代を経験し、苦しみながらも最後は連合国の一員として戦勝国の地位を得た。自らを英雄視するのは無理もないとも言える。またこうした歩みから当然のことながら自国を加害行為とは無縁の純粋な被害者と位置付ける意識が強く「ナチスに占領された国の中で、もっとも対ドイツ協力者を出さなかった国」といった言説が広く見られる。

さて今回のテーマのイエドヴァブネ事件とは何か。イエドヴァブネはポーランドの小さな地方都市でワルシャワ北東百数十キロ、ビヤウイストク西北にあり、ヴェルサイユ体制下のポーランドでは中部に、現在のポーランドの領土の中では東北部に位置する。この町は1939年の第2次世界大戦勃発直後にソ連に占領され、独ソ戦開始直後にドイツ軍に占領された。この人口約2000人の小都市できおきた事件がイエドヴァブネ事件である。1941年7月10日の朝、町長と駐在するドイツの警察官の命令でポーランド人に集合がかけられた。ユダヤ人数十名が草むしりという名目で町の中央に集められ暴力をふるわれた。そしてソ連占領時代初期に建てられたレーニン像を撤去する作業を命じられ、ソ連の歌を歌うよう強制されつつ、その像を運ばされた。最終的には町はずれの納屋まで連れて行かれたうえで殺され、レーニン像の破片と共に埋められた。また残された女、子供を含む250～300人のユダヤ人グループは、その日の夕方、同じ納屋に連れていかれて施錠され、灯油をかけられ8人のドイツ人警察官の立ち会いのもと、焼き殺された。ドイツ人たちは逃げ出そうとした数人を撃った。彼らの死体も穴に埋められた。後の発掘調査では、犠牲者たちの焼け焦げた遺体のみならず、レーニン像の残骸やワルサーP38から発射された弾丸も発見された。

1949年～50年、ポーランド人民共和国当局は、事件の容疑者を逮捕して取り調べ、ナチスへの協力の罪で告発し裁判を行った。22人の被告中、12人がポーランドへの反逆ということで有罪となり、一人は死刑判決を受けた。記録によれば、裁判前の取り調べで肉体的な拷問が行われた。また判決は、ポーランド人実行犯の犯行への参加は、ドイツ人に

強制された結果だという点は認めている。

2 論争の勃発

多くの人々から忘れられ、また事件を知る僅かな人々の間でもナチス・ドイツのユダヤ人虐殺にポーランド人がいやいやながらに参加させられたという理解をされていたこの事件であったが、事件から 59 年後に大きな論争を呼び起こす。2000 年 5 月、アメリカ在住でニューヨーク大学教授のユダヤ系ポーランド人ヤン＝トマス＝グロスが小著『隣人たち』を発表。事件を主導したのはドイツ人と言うよりポーランドの一般人であると結論し、この事件に対するポーランド社会の責任を問うた。この本がポーランド本国に紹介され、話題になるにつけ賛否両論の激しい論議が巻き起こった。グロスの本は先述のポーランド人の英雄史観・被害者史観を揺るがすものであったから、ポーランド保守論壇の反発は激しかった。これを見た政府も動いた。ポーランドにはナチスや社会主義政権の人権侵害などを研究する国民記憶院という公的機関があるが、この機関を用いて独自に調査に乗り出したのだ。こうして様々な論点をめぐって展開したこの議論は、我々日本人にとっても非常に示唆に富むと思われるので、おもにポーランド論壇の論客たちの意見などを中心に紹介したい。

3 論争の実態

第 1 の論点は歴史研究の方法論である。グロスは、史料批判的な考えを重視せず、生存者が希少なこのような特殊な事件では、わずかに生き残った被害者たちの証言を反証がない限り採用するという方法で良いという考えに基づいて調査を進めた。このグロスの態度は是か非か、意見は割れた。また 1949～50 年の裁判は、社会主義体制下で行われ、取調べ手段として拷問が使われるなど問題があるが、グロスはこの裁判の記録も、基本的には信用できるとして採用している（つまり社会主義時代のポーランド政府は、この事件に関して何も隠ぺいを行う必要性がなかったのだから裁判の基本的な部分は信用して良いという判断）のだが、この点も評価が非常に分かれる。

第 2 の論点は、犠牲者の数である。グロスの著書では約 1600 人ということだが、その後の記憶院の現地調査・遺体発掘で約 300 人ぐらいと判明した。これはグロスにとっては大きい失点である。ただ、1600 という数字は以前から定説として言われていたもので、特にグロスが大げさな数を創作したというわけではない。

第 3 の論点はドイツ人の関与の度合いである。グロスとその支持者たちは、ドイツ人警官数名の関与もあったものの、総じて事件の主導権はポーランド人が握っていたという。これに対して、ポーランドの保守論壇は「現地住民を焼きつけてポグロムをおこさせる」というナチス、特に国家保安院のハイドリヒの方針を重視し、ドイツの主導性を重視している。これに対してグロスやその支持者たちは、「事件はドイツ人の命令ではなく許可によって起こった」と主張しポーランド人一般の主導性という説を譲らない。

第 4 の論点は、第 3 の点と深く絡んでポーランド人の関与である。グロスは数年前まで問題なく共存していた町長以下の普通のポーランド人住民全体がユダヤ人全体に襲いかかり殺した事件だと述べる。これに対して反対派は、能動的に動いたポーランド人の虐殺者は、町の一般住民ではなく、戦時の混乱の中で町に流れ込んで来たならず者数名であった

として、一般市民の責任を軽く見る。

第5の論点は、なぜポーランド人はユダヤ人を敵視したのか？という動機である。グロスとその支持者は、ユダヤ人側に特に恨まれるようなことはなく、反ユダヤ主義は突如爆發した、だからこそ、この事件はいつでも起こりうるのもあって普遍的な問題となるという。これに対し保守論壇などの反対派は、1939年9月～1941年6月、この町はソ連占領下にあった点に注目し、ユダヤ人が祖国ポーランドを裏切ってソ連軍の占領行政へ積極的に協力しており、それでポーランド人の反ユダヤ感情が高揚していたのが事件の一因であると主張し、ユダヤ人側にもそれなりの責任はあったとほのめかし、または明言する。ただ、今回の論争を含めて多くの客観的な研究成果は、ユダヤ人がポーランド人一般に比べて突出してソ連軍に協力的だったという説を支持していない。第1次世界大戦後のポーランド共和国建国により、ポーランド人は徐々に民族自決を実現し民族意識の高揚を経験したが、そのなかでユダヤ系住民はポーランドの公職や教育職から有形無形の差別によって締め出される傾向にあった。そこにソ連軍の東部ポーランド占領という状況が出現した。ソ連軍はポーランド共和国への忠誠心が強く、当然ソ連への憎悪が激しいポーランド人よりも、この点に関して冷淡なユダヤ人を好んで末端の行政職などに採用する傾向があり、公職におけるユダヤ人の比率は上昇した（それでもなおユダヤ人がポーランド人を含む他のエスニックグループに比べ特に突出してソ連に協力的だったわけではない）。このことが悲運を嘆き、また怒るポーランド人に印象的に受け止められ、本来そうであった以上に「ソ連に媚態を示したユダヤ人」という印象が独り歩きしたのではないだろうか。しかしまた、この論点に執着しすぎることは、そもそも大きな間違いを招きかねないとも言える。たとえユダヤ人がソ連軍に非常に協力的であったとしても、大人社会の対立に何の責任も負わない子供までがイエドヴァブネ虐殺事件の被害者だったのだから。

4 ポーランド人達の思い

これらの論議を踏まえて、ポーランド人がとるべき態度として多くの知識人が意見を述べた。グロスは言う「コペルニクスやショパンを絶賛するくせに、事件を無視するのはあまりにも傲慢ではないか」と。これに対してジャーナリストのジャコフスキは「責任とは自らの行動や影響力の及ぶ範囲の事柄に関して背負うべきもので、現代ポーランド人は事件の責任を問われない。事件の責任をポーランド民族全般に背負わせる考えは、反ユダヤ主義と同じ罪を犯すことになるのではないか？」と述べる。しかしジャコフスキのような考えに対しては、「人間は自分の所属している共同体（国家など）から様々なものを受け取っているのだから、やはり道義的な責任は生じる」という再反論もあった。またポーランドのカトリック教会でも意見は割れており、カトリック教会の保守派からは「ポーランド人の中から良心の欠けた暴徒をつくりだしてしまった責任は教会にもある。ただユダヤ人もソ連のポーランド支配に協力することでポーランド人に被害を与えた責任を認めるべき」という発言がある一方、イエズス会士のムシャウは「戦前のカトリック教会が反ユダヤ的な言説の流布を放置してきたこと、イエドヴァブネでも虐殺に反対する行動を起こさなかったことこそ問題である」と戦前もふくめた教会の行動に関して厳しい目を向ける。さらに事件の実証的な分析に根差した意見として「事件にはドイツ人の影響が存在するが、ただ事件当日のイエドヴァブネには、ある種の秩序（傍観者、野次馬も含め）が存在してお

り、それが少数の犯人による大勢のユダヤ人の虐殺を可能ならしめた（たとえばユダヤ人が町外れまで行進させられたとき、本来なら逃げ散ってしまうという行動が可能だったはずだが、行列を取り囲む沿道の野次馬たちがつくる人垣が、柵のような役割を果たしてユダヤ人に逃げることを許さなかった）、このような点で事件の責任を地域社会全体に課すことは不当ではない」という歴史学者ストラの意見も印象的である。

また、ポーランドの歴史教科書はイエドヴァブネ事件のことを明記するなど、ポーランド史の汚点にも触れつつ、占領下ポーランド人の英雄的・人道的行動にも数多く触れて両論併記的な書き方に徹しバランスを取っているようだ。いわく「ユダヤ人虐殺はポーランド人も行っていた。先にソ連に併合された地域一ついで1941年6月にはドイツ軍が占領し、行政権もドイツの行使下に置かれることになる一で、ポーランド人が自らの隣人であるユダヤ人を虐殺しているところもあった。7月7日、ラジウフでポーランド人は数百人の地元ユダヤ人を納屋に押し込め火を放った。まったく同じことが3日後の7月10日にイエドヴァブネで繰り返された。ここでも同じようにポーランド人が、納屋に押し込めたユダヤ人を生きたまま焼き殺したのである。正確な犠牲者数は今日になっては知りようがない」「反ユダヤ主義の根源をここで忘れてはいけない。ユダヤ人住民の根絶という問題にカトリック教会幹部は沈黙を保った。しかし、実に多くの神父がユダヤ人をかくまった」「ユダヤ人の主がいなくなった住居からの財産掠奪も見られた。」「ユダヤ人の悲劇を食物にする者はいた。どの社会にもいる、落ちこぼれて犯罪に手を染める人間たちであるが、戦争によるモラルの悪化とともにその数は増えていった」「大多数のポーランド人がユダヤ人の運命に無関心であった。ゲッターにユダヤ人が隔離されたことで、いっそう無関心になっていった。・・・しかし多くのポーランド人が隠れているユダヤ人の手助けをした。」

なお、蛇足ながら付け加えると、占領時代のポーランドでユダヤ人の救援にあたった多くの人々がいたのは紛れもない事実である。「ジェゴタ」という大規模なユダヤ人援護のための地下組織も存在したし、ユダヤ人に有形無形の援助を行った人々の数は相当数に及ぶと考えられる。ポーランドは、同じナチス占領下の国々でも、たとえばデンマークやノルウェーなどと比べてナチスの人種理論から見て低く位置づけられており、ポーランド人自身が（絶滅を目的とはしなくても）ドイツ側の不断の差別や暴力にさらされ、精神的にも物理的にも、あまり余裕がなかったことを考え合わせると、この事実は非常に重い。

さいごに

ポーランドのある世論調査では、「事件が明るみに出たことは良かった」と「ユダヤ人に対して恥ずべき行為をしてしまった」の合計が39%だった。

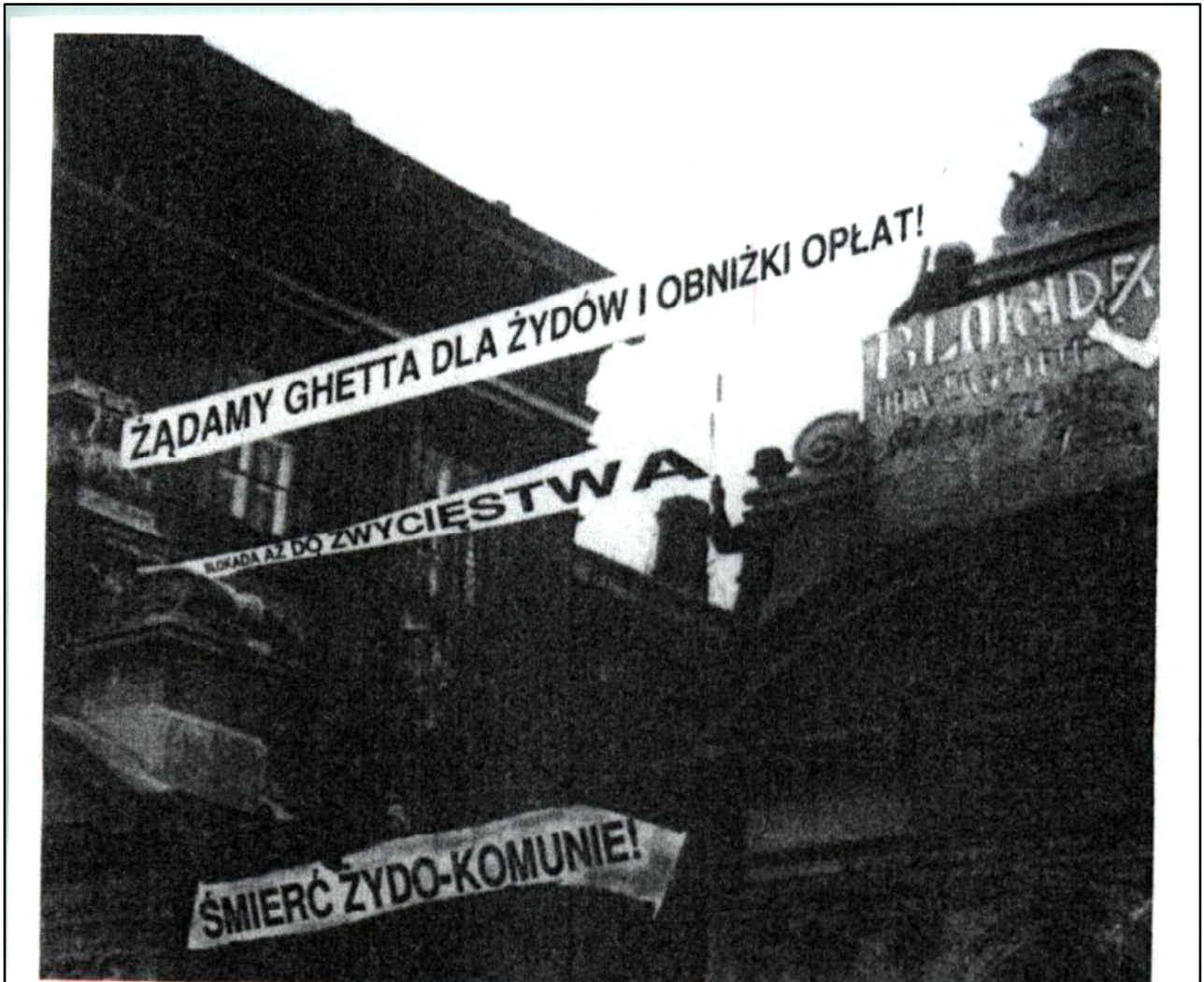
「論争にはあきあきした」「グロスに怒りを感じる」「自分には無関係である」の合計が34%だったので、国論が二分していることをうかがわせる。グロス本人は、自分の本が論争を惹起したことを喜んでいるという。

《参考文献》

J.T.Gross, *Neighbors—The destruction of the Jewish Community in Jedwabne Poland*, Penguin Books (2002)

解良澄雄「ホロコーストと普通のポーランド人～1941年7月 イエドヴァブネ・ユダヤ人

- 戦前からあったポーランドの反ユダヤ主義
(『ポーランドのユダヤ人』 251 頁より)



ワルシャワ大学正門に掲げられた反ユダヤの横断幕 1936 年
「われわれはユダヤ人のゲットーと賃金引下げを求める！」
「ユダヤ共同体に死を！」
とある。